

第4分科会

【研究課題】 知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメントと校長の在り方
 【視点①】 しなやかな知性と豊かな創造性の育成

【研究発表】 「新たな知」を拓く学習指導を目指して

宮崎県 宮崎市立生目小学校 齋藤 光 男

I 趣 旨

1 はじめに

現在、日本は世界でも類を見ない少子高齢化の急激な進行による生産年齢人口の減少に直面している。また、科学技術の目覚ましい発展に伴い、人工知能（AI）の登場、情報メディアの躍進、グローバル化、社会の仕組みや産業構造の変化などが進んでいる。この変化は、更に加速し、今後ますます予測不可能な状況になると予想されている。このような時代を担い、生き抜く子どもたちには、今まで習得した学習内容や技能を総動員して解決する力、将来直面する困難な諸問題に進んで立ち向かい自ら乗り越えていく姿勢や能力、国際的な社会問題の解決や持続可能な社会の構築に役立つ力、知識や技能を不断に更新する態度が必要である。この資質や能力は、まさしく全国小学校校長会が掲げる「新たな知」である。

それに伴い学校に対しては、「将来の予測が困難な複雑で変化の激しい社会の中で求められる力の育成を、各学校の教育課程や各教科等の授業まで浸透させ、具体化していくことが、これまで以上に強く求められている」と中央教育審議会「教育課程企画特別部会における論点整理について」で述べられている。教育の目的や目標を達成するために、各学校で教育の内容を子どもの心身の発達に応じ、授業時数との関連において総合的に組織している教育計画「教育課程」が、時代のニーズに基づき編成されなければならない。そして、日々、授業レベルで確実に展開され、常に授業を子どもの実態や成果・課題を基に改善していることが必要である。そういう営みが「新しい知」を拓くことにつながると考えている。

そこで、本研究では、「新しい知」を拓く視点から教育活動の柱である授業の見直しを図る具体的な方策の提示を試みたいと考える。

2 研究のねらい

諸問題の解決に向け積極的に行動する児童の育成を目指して「新たな知」を拓く授業の推進を図るための校長として果たす役割と指導性を明らかにする。

II 研究の概要

1 宮崎支会校長会第4部会の基本的な考え方

(1) 「新たな知」の定義の確認

まずは、校長自身が言葉の定義をしっかりと行うことが大切である。そこで、本部会で共通理解を図った。全国小学校校長会では、「新たな知」を「創造的な思考力」及び「しなやかな知性」としている。本部会では、「創造的な思考力」を、身に付けた知識や技能、考え方、体験などを基にして、直面した課題を解決していく力や新しい考え・方法を生み出す力とした。また、「しなやかな知性」を、獲得した知識と新しい知識を結びつけ活用する力や変化に対応できる柔軟な思考力・態度とした。

(2) 「新たな知」を拓くための学校経営ビジョンの提示

本部会では、「新たな知」を拓くには、学校経営者である校長が方向性を示すことが肝要であると考えた。そのため、「新たな知」の育成を目指した学校経営ビジョンを明確に職員や保護者などに提示することが重要である。学校経営ビジョンの設定段階において次のことを考慮した。今日的な教育課題を把握すること、学校や児童の実態を把握すること、地域の願いや実態を把握すること、校長の考える目指す学校像をしっかりとつことである。そのためには、十分な情報収集が必要である。さらに、集めた情報を整理し、具体的な児童のイメージできる学校経営ビジョンを提示した上で、方策を説明することが大切であると考えた。

(3) 教職員の授業改善への意識及び指導力の向上

授業を行っているのは教職員である。本部会の校長の多くが「新しい知を拓くためには、教職員の意識や技能を向上させることが非常に大事である」と答えている。そのため、職員に教育の動向や学校教育に求められている内容や児童の実態を理解させるとともに、自分の授業改善の必要性を感じさせることが必須であると考えた。また、指導技術の向上では、授業評価、授業公開、主題研究などの深化が重要であると考えた。

以上の(1)、(2)、(3)に基づき、「新しい知」を拓く授業を目指した改善を進めていく。以下、校長として学習指導の改善・充実に向けた取組を紹介する。

2 授業改善への意識の高揚への校長の取組

(1) 次期小学校学習指導要領解説「総則編」の活用

職員朝会や終礼、職員会議、職員研修などを使用して職

員に次期学習指導要領の改訂趣旨を説明した。話のポイントの一つとして、「技術革新による社会の急激な変化や急速な少子高齢化が進む成熟社会への対応」を取り上げた。ここでは、今後、一人一人が持続可能な社会の担い手として、その多様性を言動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待されることや、人工知能の思考に目的をプログラムしたり、目的のよさ・正しさ・美しさを判断できたりすることが人間の最も大きな強みになることを強調した。

次に、「学校に求められていること」を取り上げた。学校教育には、子どもたちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められていることを説明した。学習指導要領の枠組みを改善する6点、①「何ができるようになるか」(育成を目指す資質・能力)、②「何を学ぶか」(教科などを学ぶ意義と、教科など間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成)、③「どのように学ぶか」(各教科などの指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実)、④「子ども一人一人の発達をどのように支援するか」(子どもの発達を踏まえた指導)、⑤「何が身に付いたか」(学習評価の充実)、⑥「実施するために何が必要か」(学習指導要領などの理念を実現するための必要な方策)を視点を授業を改善する必要性を話した。

また、「生きる力」をより具体化し、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を、ア「何を理解しているか、何ができるか(生きて働く「知識・技能」の習得)」、イ「理解していること・できることをどう使うか(未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力など」の育成)」、ウ「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性など」の涵養)」の三つの柱に整理するとともに、各教科などの目標や内容についても、この三つの柱に基づく再整理を図ることの大切さを説明した。

(2) 保護者や学校関係者評価委員の願いの活用

アンケートの結果を基に、保護者の願いは、学習のきまりの徹底、学力向上及び読書活動の推進であることを話した。また、学校関係者評価委員からは、「これまでの意欲的・主体的な学習と基礎・基本の定着を促進するための様々な取組などを継続的に行い、全体的な学力向上に努めること」「全員による授業実践や朝の活動計画の見直しなどの活動を今後も授業力向上につなげ、学力向上を図ること」「授業中、児童がよく挙手しているので、継続化を図ること」「研究の成果をさらに深化しようとする職員の意欲が高く、評価できること」「学力向上に向け教師の指導力を期待していること」「学校内での読書とともに、家庭読書の推進を図る手立てを講じること」「今後も学校あげての授業の取組改善と保護者に理解・協力を得るための工夫を継続すること」などの期待が寄せられたことを話した。

(3) 職員アンケートの活用

職員アンケートに出た「目指す児童像を児童自身が意識

して努力すること」「基礎・基本の定着」「分かる授業の実施」「意欲的・主体的に児童が取り組む授業の実施」が授業改善のポイントであると職員に伝え、意識化を図った。

(4) 学力調査結果分析の活用

学力面では、国語科・算数科共に、基礎・基本よりも活用問題に対して力を十分には発揮していない傾向にある。国語科では、「目的に応じ、内容をとらえながら本や文章を読み、自分の考えを明確にする力(書く能力、読む力)」が課題である。算数科では、「数量や図形についての知識・理解を生かして、表現したり考えを深めたりする力(数学的な考え方)」が課題である。また、主体的に考え、意欲的に発表しようとする態度の育成や既習事項の定着も必要であることを、職員にデータを基に認識させた。

(5) 校長室便りの活用

校長室便りを発行して、教育界の動向や次期学習指導要領の趣旨の説明、授業の視点についての情報や校長の考えを伝え、職員の意識を高めた。便りの内容は以下のとおりである。

- 子どもたちの学びを支えるカリキュラム・マネジメント
- 教科などの指導の観点と主体的・対話的で深い学び
- 授業の視点、総合的な学習の時間のねらい
- ふるさと教育の充実
- 目指す授業
- 学級活動の目標と内容
- 学校経営ビジョン
- これからの教育
- 特別の教科道德の授業の進め方

3 授業力向上に向けての校長の取組

(1) 主題研究の充実

平成28年度の反省(研究の見通しをもってスムーズに進めること、研究主任の負担を軽減すること)を受け、平成29年度から研究推進企画会(出会者:校長、教頭、教務主任、研究主任)を委員会活動の時間に設定した。会では、本年度の研究の方向性の決定、進捗状況の共通理解と今後の主題研究の進め方の検討・提案などを行った。

また、平成29年度から主題研究の内容を授業改善に特化して取り組むようにした。以前までは、組織を言語活動班、生目授業モデル班、家庭との連携班、学習の約束班、読書活動班の五つであったが、組織を見直して授業改善班と学力定着班の二つにした。

① 生目授業モデルの改善

主題研究では、平成28年度の研究であった生目授業モデルを、学力分析の結果や今後必要とされる態度・技能、学校経営ビジョンに掲げる主体的な学びの推進を基にして思考力や判断力、発表力、コミュニケーション能力、活用力を伸ばすように、改訂した。なお、【生目授業モデル】の流れの概略は、以下のとおりである。

【生目授業モデルの流れ】

1 思考・判断(個で考える個人思考)

- ・ 目的(単元のめあて)に応じて学習内容(問題)をしっかりとらえながら、自分の考えを明確にする。

- ・ 自分の考えを言葉や数、式、図、表などに明確に書くことができるよう、ワークシートを工夫したり、ヒントカードの効果的な活用を図ったりする。

2 表現（個の考えを交流する集団思考）

- ・ 自分の考えや知識を生かして、相手に伝わるように説明したり友達の考えを聞いたりする。
- ・ 発達段階に応じた表現をし、話し合いの充実を図る。

3 思考・判断（再度、自分で考える個人思考）

- ・ 集団で交流したことを基に、再度自分の考えを深める時間を確保する。
- ・ 練習問題や応用問題を解く。
- ・ 自分の考えをまとめ直したり、新たに書き加えたりする。

② 授業視点表の活用

授業改善のために授業視点表を改善させた。改善のポイントとして目指す授業像「児童が主体的に考え、互いに高め合う授業の実施」や主題研究のテーマ「わかった、できたと実感できる生目っ子の育成」、協議題を明示することにした。授業後に項目ごとに評価を行い、授業改善の資料として活用する。

【授業視点表の抜粋】

授業像「児童が主体的に考え、互いに高め合う授業の実施」
テーマ「わかった、できたと実感できる生目っ子の育成」

	項目	チェック欄
1	・ 本時のねらいにそって内容や活動を厳選し、活動している。	
7	・ 学習計画表や既習事項を活用して、児童が学習にめあてや目標を設定している。	
9	・ 児童が既習経験をもとに、予想や見通しを立てている。	
10	・ 児童が既習事項（言葉、サイドライン、図、数直線等）を使って、解決し、解決の仕方をまとめている。 (個人思考)	
11	・ みんなで学び合い（発表、説明、話し合い）をし、修正しながらまとめている。 (集団思考)	
12	・ 児童自身めあてにそったまとめをノートに書いている。 (個人思考)	
14	・ 習熟のための時間を確保している。	
17	・ 振り返りの時間に本時で分かったことやできたこと、解法の流れをノートに書いている。	

③ いきいきタイムの改善

学力定着を図るために、毎週火曜日（15分間）の補充学習「いきいきタイム」を実施している。平成28年度までは、各学級担任が主に内容を考え進めていたため効果があまり上がらなかった。そこで、学校全体で系統的かつ、学年一斉に進めるようにと研究部に指示した。研究部からの提案で、全国学力・学習状況調査やみやぎ学

力状況調査を基に、国語科と算数科についての計画を作成した。9月以降の計画案を以下に示す。内容としては、A（基本）問題で努力を要する問題や文章力の向上を図る問題、B（活用）問題を設定した。B問題を実施するために、各学年問題集を購入した。

【いきいきタイム 計画表の抜粋】（10月と2月）

		10月（4回）	2月（4回）
1年	国	主語、述語	かたかなの練習
	算	時刻の読み方、加法	加法、減法
2年	国	助詞「は、へ、を」	文章の視写（報告文など）
	算	かさ（mL、dL、L） 文章問題	図形（三角形、四角形）
3年	国	主語、述語	文章の視写（報告文など）
	算	長さや体積、単位交換	四則
4年	国	B問題	文章の視写（報告文など）
	算	長さや重さ、単位交換	B問題
5年	国	主語、述語、修飾語 B問題	文章の視写（報告文など）
	算	面積、単位交換	四則、□や△を用いた式 B問題
6年	国	主語、述語、修飾語 B問題	文章の視写（報告文など）
	算	面積や体積、平均	基本的な用語や公式 四則、B問題

③ ノートの使い方

分かる授業や思考力及び表現力を高めるために、ノートの使い方について統一するように研究部に指示した。視点としては、授業の流れが分かるノート（問題→めあて→見通し→考え『個→集団→個』→まとめ→練習→振り返り）及び児童が考えた足跡が残るノートにすることにした。日付と単元名、めあて（青線で囲む）、まとめ（赤線で囲む）を記入することも確認した。さらに、表記の仕方の仕方についても以下のとおりにした。

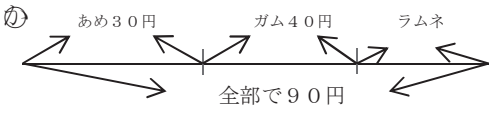
Ⓜ問	: 学習問題	め	: めあて	見通し	
考	: 考える（個人思考、集団思考、再個人思考）				
まと	: まとめる	練	: 練習問題	返	: 振り返る

また、見本として職員に以下を提示した。

【算数例】

11	かくれた数はいくつ（1）
13	Ⓜ あめとガムを買いにいきました。あめは30円、ガムは40円でした。ラムネもほしくなって買ったら、全部で90円になりました。
P	ラムネは何円ですか。
90	Ⓜ これまでに使った線分図をかいて、考えよう。
①	Ⓜ 買ったものの値段をあわせると全部になる。 (ねだん) + (ねだん) = (全部)

P 91

① 

② 考え方 全部からガム, あめのねだんを順にとると, ラムネのねだんになる。
式 $90-40=50$ $50-30=20$ 答え ラムネ 20円
みんなの考え方

③ 線分図をかくと, よくわかり, もんだいをとくことができる。

④ 式 $30+40=70$ $90-70=20$ 答え 20円
考え方 あめとガムをあわせて, 全部からひくと, ラムネのねだんになる。

⑤ 線分図をかくと, もんだいがわかり, しきを立てられる。答えも出すことができる。

(2) 一人一公開授業の実施

日々の授業の充実を推進することが主題研究の本来の目的である。主題研究の内容が研究授業だけに使われたら, 児童の学力向上は実現できない。しかし, 平成28年度は, 公開授業を実施した教職員は23名中7名であった。これでは, 不十分であると判断し, 平成29年度から一人一公開授業を実施した。

① 実施の流れ

指導案は, 略案で「単元の目標」「本時の目標」「学習指導過程」を記載している。学習指導の流れは, 導入時に「めあての設定」「学習の進め方や解決方法の見通し」を, 展開時に「図などを活用しての個人思考」「根拠を基にしてまとめ上げる集団思考」「個人思考による確かめ」を, 終末時に「学習の振り返り」を行うことに統一した。

参観者については, 授業者と同じ学年担任や管理職, 専科職員を主にしている。参観者は, 授業に視点に従ってコメント表を渡すようにしている。授業者は, 自己評価や参観者の意見感想を生かして, 授業の成果や課題, 改善のポイントをまとめる。

② 授業後のまとめ

5年算数科単元「順々に調べて」の本時目標「数の少ない場合から順に調べ, 数量間の規則性を見つけて, 問題を解決することができる」を例にして説明する。

【5年授業後のまとめ】 ○良い点 ●改善点

個人思考

- 自分から進んで図を描き, 表を完成させ, きまりを見つけている児童が多かった。
- 前時にノートに描いた図と表を見ながら, 前時を想起させることで, 本時も少ない場合から順に調べて, きまりをスムーズに見つけることができた。
- 4段や5段の図を描くのに苦労していた児童に対して, 机間指導をして支援する必要がある。

集団思考

- 実物投影機を活用し, 順々にきまりを見つけたと, 説明をすることができていたので, 自分と友達の考えの共通点や相違点に気付くことができた。

- 全体でまとめをするときに, うまく問題が解けたのはなぜかを考えさせると, もっと児童自身でまとめることができたのではないかと思う。

再個人思考

- 図を描いて表に整理し, 数値の差からきまりを見つけていく一連の解決方法を理解し, 身に付けていた。
- 練習問題をさせる時間を十分には確保できなかった。

授業後のチェックポイント

- 指導内容を精選することによって, 問題, めあての把握, 確認をしっかりと行うことができた。
- 児童一人一人の理解度を授業の中で把握し, 実態に応じて個別指導を行う必要がある。
- もっと児童の発言を生かすようにしていきたい。

③ 公開授業への校長の助言

公開授業の校長の感想を全ての授業者に口頭並びに文書で伝えている。頑張って授業を公開した職員への感謝の気持ちと更に指導力を高めてほしいとの思いを込めて伝えている。その1例を以下に記載する。

【5年 算数科：見積もりを使って】の授業コメント

段階	授業コメント
導入	<ul style="list-style-type: none"> ・問題を提示して, 前時の学習と同じである「買えるかどうかを見積もる」ことを児童と確認した点はいいです。特に「見積もる」の言葉が大事です。 ・前時との違いをおさえて, めあてを設定したので, 児童の意識が高まりました。 ・学習の展開を確認し, 式で説明することをおさえたので, 解法の方向性を示すことができました。
展開 (個人)	<ul style="list-style-type: none"> ・2470円を2000円, 3610円を3000円にして立式($2000+3000=5000$)していることを児童は理解できていました。また, この式を使って5000円では買えない理由をノートに書いていました。
(集団)	<ul style="list-style-type: none"> ・切り捨てし, 元値より安く見積もっているので, 5000円では買えないと, 児童が言っていました。 ・全児童が切り上げた式において, 7000円になり, 7000円で買えると説明していました。 ・まとめでは, 切り捨てや切り上げを使って見積もりし, 買えるか買えないかの判断した学習を想起させ, 児童にまとめさせるといいと思います。
(個人)	<ul style="list-style-type: none"> ・練習問題をさせて, まとめたことよさを実感させたことはいいいと思います。 ・全児童が問題を解けていました。素晴らしいです。
終末	<ul style="list-style-type: none"> ・問題が分かったとの感想が多かったです。

Ⅲ まとめ

職員が今後の学校教育の在り方について理解を深めることにより, 授業改善の必要性を実感でき, 主題研究や日常の授業の充実を図ることができた。今後は, 児童の実態を的確に把握するとともに, 授業チェックを継続して児童の主体的に学ぶ態度や学力の向上に努めていきたい。

第4分科会

【研究課題】 知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメントと校長の在り方
 【視点②】 しなやかな知性と豊かな創造性を育む教育課程の編成・実施・評価・改善

| 研究発表 |

しなやかな知性と豊かな創造性を育むカリキュラム・マネジメントと校長の指導性について

北海道 喜茂別町立鈴川小学校 中村和男

I 趣旨

1 はじめに

予測困難な社会の変化の中で、子どもたちには、受け身ではなく主体的に事象に関わり、その過程を通して自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けることが求められている。

平成32年から実施される新学習指導要領においても、「生きる力」の育成に向けた教育課程の課題を受け、教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現が求められている。そして、学びの質の向上に向けた取組では、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指すことになり、『社会に開かれた教育課程』の理念のもと、学校改革を進めることとなる。

2 研究課題・視点の押さえ

第4分科会研究課題『知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメントと校長の在り方』は、分科会の趣旨からも、新学習指導要領の具現化に向けた学校経営の推進と課題を同じにするものにとらえた。そこで、後志小中学校長会では本分科会の研究課題解決に向け、今回改訂のキーワード①カリキュラム・マネジメントの実現、②主体的・対話的で深い学びの実現、この二つの視点から共同研究を進めることとした。

そして、平成29年2月に小学校長を対象に『主体的・対話的で深い学びの推進に関する調査』を実施した。その調査結果と考察から、カリキュラム・マネジメントの実現や主体的・対話的で深い学びの実現を推進するにあたり、次のような課題が見えてきた。

- 新学習指導要領の理解を進め、自校におけるビジョンの共有を図ること
- カリキュラム・マネジメントの実現に向けた意識化を図ること

これらの課題については、研究の視点2『しなやかな知性と豊かな創造性を育む教育課程の編成・実施・評価・改善』の「全教職員が子どもたちに育成すべき資質・能力について共通理解を深める」、「しなやかな知性と豊かな創造性を育むための教育課程編成上の課題を明確にし、…」等を手掛かりに究明していくこととした。

II 研究の概要

1 後志小中学校長会の研究

(1) 研究プロジェクト

後志小中学校長会は、平成29年4月に、第15次研究の研究主題を「成長の連続性をつなげる学校経営の推進と校長の在り方」とし、各4ブロックの研究交流会と管内研究大会を開催している。また、小、中学校それぞれの特性を生かした研究活動を推進するため、校種別に研究プロジェクトチームを組織し、研究の充実を図る取組を進めている。

また、第14次研究の小学校研究プロジェクトでは、仮説検証型の方法で研究を進め、大きな成果を得ることができた。その経過を踏まえ、本共同研究も、管内小学校全てにおいて課題を共有し実践・検証を行うことで、研究課題の解決を図るとともに、研究成果の迅速な実質化を進める。

(2) 研究内容・計画

- 調査研究～現状把握及び取組に係る成果や課題
- 経営研究～カリキュラム・マネジメントにおける校長の指導性
- 実践研究～実践例の紹介
- 1年次～管内の現状把握、課題解決への提案
- 2年次～実践・改善、まとめ

2 研究仮説の設定

(1) 研究仮説

仮説1

新学習指導要領を反映させた学校経営ビジョンを構想し、視覚化されたグランドデザインによって分かりやすく提示するなど校長がリーダーシップを発揮することで、職員は新学習指導要領の理解を進め、職員間におけるビジョンの共有が図られるだろう。

仮説2

校長がリーダーシップを発揮し、教科等横断的な視点によるカリキュラムの編成や実施を具体的・積極的に推進させることで、学校におけるカリキュラム・マネジメントの取組がこれまで以上に進み、活性化が図られるだろう。

(2) 研究仮説設定の理由

校長は打ち出した方針が「何のために」、「どのような改善を目指すのか」を教員に理解させ、共有しながら学校経営を進める。今回は大きな改革であるため、より丁寧に分かりやすい説明が求められる。そこで、仮説1では、グランドデザインの作成やその浸透におけるリーダーシップを手掛かりに、カリキュラム・マネジメントや主体的・対話的で深い学びの実現に向けた校長の役割や指導性について検証を進める。

そして、カリキュラム・マネジメントの実現における三つの側面からは、重要性の意識調査で回答の少なかった『教科等横断的な視点によるカリキュラム編成』にあえて焦点化し、教職員の意識高揚を図ることで、カリキュラム・マネジメント全体の活性化につながると考え、仮説2を設定した。これまでも「児童の実態を考慮し、指導の効果を高めるため合科的・関連的な指導を進める。」とあった教科等横断的な視点によるカリキュラム編成については、実態調査から検証を進めることとした。

3 仮説1, 2の推進に関する調査①から (29年5月実施)

(1) 新学習指導要領の理解や共有を図る取組

取組内容・方法	%	取組内容・方法	%
グランドデザイン作成	49	ロードマップ作成	46
資料の職員会議提示	78	研修への位置付け	85

この時点で、グランドデザインはすでに半数近い学校で作成が推進又は計画されていた。一方で、具体的構想やアイデアを求める校長の声も多く、取組の準備を進めている校長が大半であった。また、ミドルリーダーを中心とした組織的・協働的な推進が必要と考える校長も多かった。

(2) グランドデザインを作成・活用した実践

① 「教育課程大綱作成の流れ」の活用 (K小学校)

- 教育課程編成に関わる方針・タイムスケジュール・担当の提示, 教育課程編成委員会の発足
- 新学習指導要領の学習会開催～前文や総則読み合わせ, 自校の改善への提案

K小の実践は、調査の中で実践・参考例等の資料を求め意見もあったことから、提示されたグランドデザインやロードマップをはじめ、他校の特色ある実践とともに管内に積極的に発信した。

(3) 教科等横断的な視点によるカリキュラムの編成・実施

	A	B	C	D
平成29年度	5	13	72	10
平成30年度	5	23	59	13

A: 行っている B: 少し C: あまり D: 行っていない

(4) 教科等横断的な視点によるカリキュラムの編成・実施の推進に必要な・重要な校長のリーダーシップのポイント

	役割や指導性的内容	数
1	職員への理解, 周知, イメージ化	19
2	具体的取組やロードマップ策定の指示	11
3	職員との共有, 参画意欲の高揚	9
4	育てたい力の明確化	7

5	ミドルリーダーの活用や意識向上	6
5	協働体制の確立や組織の活性化	6
6	学校や児童, 地域の実態把握	4
7	取組の重点化, 時間の創出, 校長自らの学習や姿勢	3
8	進行管理, 人材確保, 近隣校との連携	2

教科等横断的な視点によるカリキュラムの編成・実施の推進については、現行ではあまり積極的に行われていない状況であった。なお、推進している学校の多くは、総合的な学習の時間を中心に編成・実施を行っていた。中には『課題意識と表現力といった自校の課題を中核に据えた取組』や、『地域と関わり, 地域に学ぶ活動を系統立てた取組』など、新学習指導要領の内容に合致した取組も進められていることが分かった。

また、新学習指導要領の下での準備も、7割以上の学校で、まだ進んでいない状況にあった。仮説2においても、仮説1と同様に、まずは教職員の理解や共有を進めること、そして、育てたい力を明確にした具体的な取組やロードマップの策定に、リーダーシップの発揮が必要と考えていることが明らかとなった。

(5) 課題の明確化と取組の焦点化

この調査からは、「主体的・対話的で深い学びの実現」や「教科等横断的な視点によるカリキュラムの編成や実施」などの新学習指導要領の周知や共有に向け、準備段階の学校(校長)が多いこと、そして、早急に目途をつけたいこととして次の3点が見えてきた。

- A) 「何を, どのように, いつまで」の見通しが不透明
- B) 学校力がチームとして機能することへの不安
- C) 情報や資料等含めイメージの不足

そして、平成31年度においては、少なくとも仮説1, 2の取組が進み、さらに次のような学校の姿を目標としてイメージできることが確認された。

- A) 学校が一体となってカリキュラム・マネジメントを推進するために、校長は、どのチームが、何を、いつまでなどの見通しの共有を図り、取組を可視化している。
- B) 課題解決や諸準備を効果的に進めるために、ミドルリーダーが、主体的に各チームを牽引し、高い協働性のもとで取組の具現化を図っている。
- C) 校長の方針のもと、学校は、新学習指導要領を踏まえた教育課程の枠組を編成し終え、教科の年間指導計画の作成等細部の見直しを進めている。

A～Cの実現にむけ、校長がリーダーシップを発揮することが重要であると考えた。

特に、29年度後半に各校で予想される取組の具現化においては、次の3点を優先的に進めることが課題となることを確認した。

- A) グランドデザイン+ロードマップを用意すること
- B) ミドルリーダー中心の組織体制を整えること
- C) 校長が自ら学習し、理解を深めること

4 仮説1, 2の推進に関する調査②から (30年2月実施)

(1) 共通理解に立った具体的実践に向けて

校長会では、平成30年度経営ビジョンの作成などの具体的実践が本格化する前に、調査①の結果を踏まえた取組のポイントについて実践例を提示しながら共通理解を図った。

仮説1の「新学習指導要領を反映した学校経営ビジョン」の視点からは次の2点を確認した。

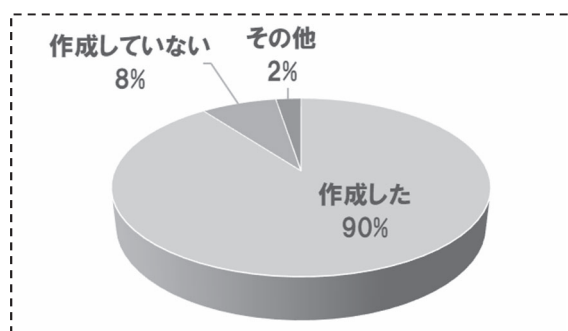
- ① 効果的な反映のさせ方や見える化について
 - ・学校課題との明確なつながり
 - ・新学習指導要領の中のキーワードの活用
- ② グランドデザインの分かりやすい提示について
 - ・コンパクト、インパクト、構造的

また、仮説2の「教科等横断的な視点によるカリキュラムの編成・実施」の視点からは次の点を確認した。

- ① 喫緊の課題について
 - ・道徳の全体計画(別業)の作成

以上の内容を具体的に共有することで、実践イメージが明確になるとともに、取組の推進がさらに加速されるのではないかと考えた。

(2) 平成30年度のグランドデザインの作成から



新学習指導要領を反映させたH30年度学校経営ビジョンを提示する際、グランドデザインを作成した校長は全体の約9割(前回調査は約5割)で、ほとんどの校長がその作成作業も行っていた。

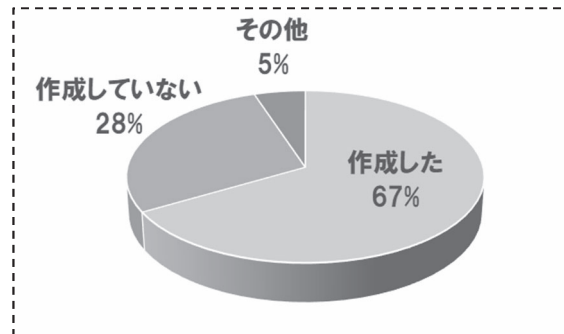
特徴としては、目指す子どもの姿や三つの資質・能力を位置付けて作成したという回答が多く、「社会に開かれた教育課程の実施」を位置付ける、重点課題として改訂内容を位置付けるといった回答も複数あった。

スローガンやキーワードの活用など分かりやすいデザインで作成したという回答も多かった一方で、保護者や地域への提示も視野に、「わかりやすさ、シンプルさ」を今後の課題と考える校長も多かった。また、「だれが、なにを、いつまで」の明確化、職員への浸透・共有の進捗状況、評価・検証などを今後の課題と考える校長も複数いた。

(3) グランドデザインを作成、活用した実践

- ① 育てたい資質・能力の明記
 - 社会を生き抜く力(「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性等」)が中心(H小)
- ② キーワードの効果的な位置付け
 - 「学校・保護者・地域との連携」が軸(O小)
 - 学びの地図やPDCAサイクルを位置付け(I小)
- ③ ロードマップも効果的に併記
 - 学力、体力の各向上プランも提示(R小)

(4) 平成30年度のロードマップの作成から



新学習指導要領を反映させたH30年度学校経営ビジョンを提示する際、ロードマップを作成した校長は全体の約7割(前回約5割)で、作成作業に関わる校長は5割弱で、教頭やミドルリーダーに指示しているケースも多い。

特徴としては、教育課程の見直しなど完全実施(平成32年度)までのスケジュールだけでなく、平成30年度を取組の年間スケジュールを作成したケースも多かった。

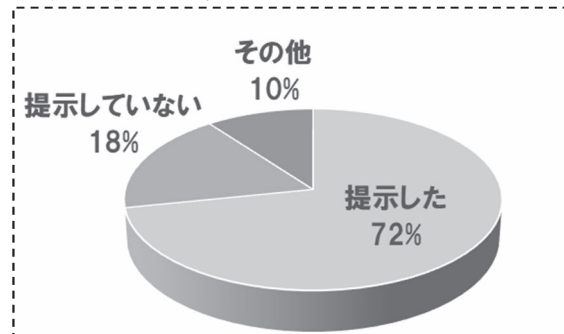
具体的には外国語・外国語活動のロードマップ作成が多く、生活科・総合的な学習の時間、教科等横断的な視点の指導、CSに関する取組のロードマップを作成した校長も複数いた。

ロードマップについても作成以降の具現化や進行管理を今後の課題として挙げる校長が多かった。そして、職員の経営参画意欲や協働性の向上、組織の活性化についても課題として挙がっていた。

(5) ロードマップを作成、活用した実践

- ① 平成32年度に向けたロードマップ
 - 新学習指導要領の完全実施に向け、移行期ロードマップとして学校課題別に提示(O小)
 - 新教育課程編成のための準備スケジュールとして、3か年の計画を提示(K小)
- ② 1年間の見通しを目的としたロードマップ
 - 新学習指導全面実施までの短期ロードマップとして提示(A小)

(6) 教科等横断的な視点からの方針などの提示



教科等横断的な視点によるカリキュラムの編成・実施については、校長の7割以上(前回3割弱)が具体的な方針やミッションを示していた。

具体的には、総合的な学習の時間を中心に編成を指示した校長が多く、学校課題や重点目標、育てたい資質・能力を核に、カリキュラムの編成を指示した校長も複数いた。

一方で、まだ方針やミッションの提示を進めていない校長も2割程度おり、課題の中でも、具体的なイメージの共

有、具体化や編成の工夫に関する内容が多かった。また、地域づくり、地域に学び・地域に返すなどの「社会に開かれた教育課程」の実現を課題とする校長も複数いた。

なお、道徳科の別業に関しては、作成や見直しを指示した校長が多かった。

(7) 教科等横断的なカリ・マネの方針や指示の実践

① グランドデザインへの位置付け

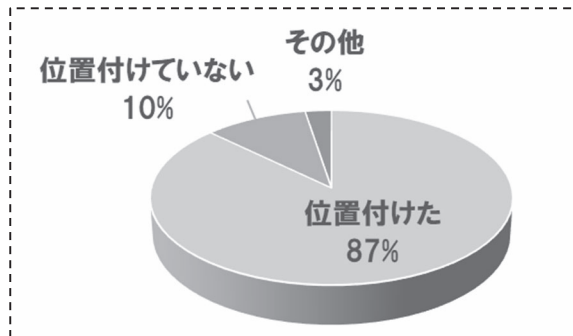
○学びの地図の中でカリ・マネの視点を明記（I小）

② 教育課程編成方針の提示

○新学習指導要領を踏まえたカリ・マネの確立（M小）

○各教科、領域などで育てたい力の明確化（N小）

(8) PDCAサイクルの見直しや新たな確立の位置付け



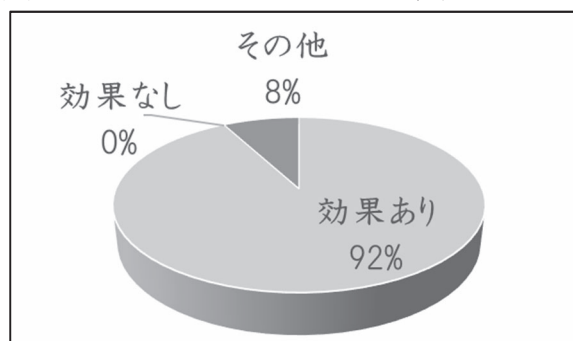
カリキュラム・マネジメントにおけるPDCAサイクルの見直しや新たな確立などについては、9割近い校長が平成30年度の学校経営ビジョンへ位置付けており、約6割の校長が方針を示し、3割の校長が具体的な実践事項として位置付けていることが分かった。

内容としては、教育プラン（推進プランなど）の活用、学校評価の工夫などを通じた取組が多く、学習指導や総合的な学習の時間、外国語や道徳など、より具体的に位置付けているケースも複数あった。

Ⅲ まとめ

1 仮説1、2の推進に関する調査③から（30年4月実施）

(1) グランドデザインやロードマップの効果



4月の調査では、グランドデザインやロードマップの作成・提示が職員の理解や共有を進めるのに効果的だったと感じている校長が約9割であった。具体的な内容としては、

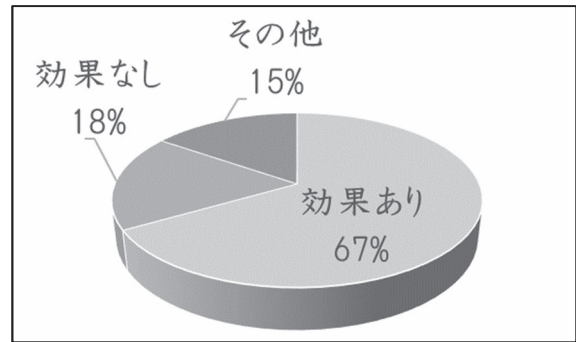
○ビジョンの共有や学習指導要領の理解が進んだ

○職員の協働性が高まってきた

○職員の経営参画意欲の向上が図られた

などの成果をあげる校長が多く見られた。

(2) 教科等横断的なカリ・マネ実現の効果



教科等横断的な視点による具体的推進からカリキュラム・マネジメントが進み、活性化が図られたと考える校長は67%であった。具体的な内容は、次の通りである。

○カリ・マネの改善・充実が図られるようになった

○人的・物的資源などの活用が効果的に進んできた

一方で、職員に「教科等横断的な視点…」の必要性を理解させ、具現化へのイメージをもたせることがあまり進んでいないといった課題も挙がっていた。

2 研究の成果

(1) 新学習指導要領の実施に向けた取組の推進

管内の小学校においては、本研究を通じて新学習指導要領の理解を深めるとともに、自校において目指す子どもの姿をはじめ、方針や手立て、スケジュールなどの経営ビジョンの共有がこれまで以上に進んだ。したがって、移行期においてもスムーズに取組をスタートさせることができた。また、教育課程編成上の課題解決に向け、ミドルリーダーを中心としたワーキンググループが活性化するなど、組織的・協働的な学校経営が実現されるようになってきた。

(2) カリ・マネの実現に向けた意識や意欲の向上

本研究を通じて、校長自ら自校のカリキュラム・マネジメントについて学び、考える機会となり、PDCAを基本とするマネジメントサイクルの見直しや再構築のきっかけとすることができた。また、意図的に職員のカリキュラム・マネジメントの意識化を図ったことによって、学級や分掌を問わず主体的に業務を推進する職員の姿が増え、自らの資質・能力を向上させようとする姿に広がっている。

3 今後の課題

(1) 進行管理と評価・検証

学校経営方針やビジョンを受けた具体的取組を適時チェックし、迅速な改善・実施へつなぐサイクルの確立、また、「だれが、何を、いつまでに」などを明確にしたシステムの確立が急がれる。その際は、取組指標に加え、成果指標などで子どもの成長の姿をもとに、ぶれないカリキュラム・マネジメントの実現を重ねていくことが重要である。

(2) 社会に開かれた教育課程の実現

地域と連携・協働を図ったカリキュラム・マネジメントの実現に向け、校長自ら関係機関と繋がり、社会に開かれた存在になる必要がある。また、校内においても、子ども像や方針などを職員と共有し、職員にとってやりがいのあるミッションとして提示することが重要である。